

100周年記念寄稿

教皇フランシスコについて

上智大学 名誉教授
山田 經三

序

上智大学そして経済学部創設100周年記念にあたって、上智大学設立母体であるイエズス会、その会員、私たちの同僚である教皇フランシスコを紹介するのは有意義であると考え、書くことにする。

2013年3月13日、新教皇誕生の直後から彼の内面からほとばしり出る輝き、福音に基づく謙遜、簡素、近づきやすさなど、そのすべての立ちいふるまいが非常に印象的で、深い感銘を受けた。この教皇フランシスコなら必ずや、現代世界におけるカトリック教会の新たな前進を期待できると確信するに至った。

こういう心でこの記事を書くことにした。この記事を通して教皇の真の姿とメッセージをできるだけ多くの人々に紹介し、彼の生き方すべてを通して示されている招き、メッセージに多くの人々が答えていくことに、微力ながらも役に立つことができれば、これにまさる喜びはない。

I イエズス会員としては、はじめての教皇

元上智大学教授であったアドルフォ・ニコラス総長は次のような声明を出している。

教皇フランシスコの選出にあたって

全イエズス会員宛

「イエズス会を代表して、イエズス会士ホルヘ・マリオ・ベルゴリオ枢機卿が新教皇に選出され、教会に大きな希望の道が開かれたことを神に感謝いたします。

イエズス会員は皆、祈りの中で、わたしたちの兄弟である新教皇と一致し、この難しい時期に教会を指導する責任を寛大な心で引き受けられたことを感謝いたします。「フランシスコ」という名は、教皇が貧しい人々の近くにいるという福音の精神、素朴な人々との一体性、教会の刷新への意欲を感じさせます。神の民の前に姿を現された最初の瞬間から、新教皇は、単純さ、謙遜、司牧者としての体験、そして、霊的な深さを目に見える形で示されたのです。…」

イエズス会総長

アドルフォ・ニコラス

ローマ、2013年3月14日

教皇職を担われる教皇フランシスコとともに

全イエズス会宛

「…神とその子イエスの心に従い、貧しい教会、貧しい人々のための教会を作り上げるために協力することができるのは、謙遜な心があってはじめてできることです。

勝利主義に一切陥ることなく、新たな力と熱心さをもって、イエズス会と兄弟フランシスコの間の親しさを確認いたしましょう。今こそ、教皇の願い、すなわち、彼とともに、彼のために、祈るという願いに答えるべき時です。主における友として、わたしたちは、教皇の十字架と命への道とともに歩み、イエズス会の教会的靈性に従って、全教会が体験している喜びと信頼の心をもって、教会が自由にわたしたちを派遣できるように身をゆだねます。

復活祭の準備にあたって、父なる神が、いと小さきイエズス会の召出しを、喜びをもって味わう恵みを与えてくださるよう祈ります。」

キリストにおいて

イエズス会総長

アドルフォ・ニコラス

ローマ、2013年3月24日

(原文スペイン語、英語から邦訳)

3月27日付け『サンケイ』新聞『小さな親切、大きなお世話』欄で、作家の曾野綾子さんは次のように述べている。

「新教皇はアルゼンチンのイタリア系の移民の家庭に生まれ、後にイエズス会という世界をリードするような学僧たちを育てる修道会に入会した。イエズス会は、日本では上智大学などの学校を経営している。

イエズス会は、世界のあらゆる僻地にまでも危険を冒して神父たちを送り込み、どんな田舎の村でも優秀な少年を見つけて教育した。

私はひそかにそれを「イエズス会の一本釣り」と言っている。見いだされた貧家の賢い少年たちは、カトリックの神父になることを望まれはしたが、強制はされなかった。それぞれの国でよい父になって、その土地の発展に働いてくれれば、イエズス会の教育目的は達成されるからである。

英語で言うと、「イエズス会」は「ジェズイット」というのだが、この単語には後に「詭弁家」とか「陰険な人物」とかいう意味まで付加された。学僧たちがこぞって非凡な秀才だったからである。

新教皇は、栄耀栄華を捨てて乞食坊主に徹したフランシスコ的な生き方を希求し、『貧しい人々のための教会』を提唱した。同時に教皇が、ジェズイットの複雑さと叡智を兼ね備えているとすれば、この困難な対立の時代に、教会はまさに得がたい牧者を得たといえる。」

II 迫害下の日本のカトリック信者について述べる教皇

教皇は3月13日の選出依頼、「聖マルタの家」という施設に住み、パチカンで働くさまざまな部署の職員たちを会衆として定期的に早朝ミサを捧げている。

教皇は、17世紀に宣教師たちが追放された後、2世紀にわたって信仰を守り抜いた日本のカトリック信者にも触れた。ようやく宣教師たちが戻ること許された時、彼らが見出したのは、「全く秩序を保った共同体、教会で洗礼を受け、教えを受けて、結婚もした人々だったのです。」と教皇は語った。

III 何より人を大切にする教皇

筆者と共に東京の本郷共同体で暮らしていたアルゼンチン出身のイエズス会員、ホアン・カルロス・アイダル神父は教皇とのなつかしい生活、彼の特徴について次のように語る。

「1985年、私が修練を終え、神学院に移った時、彼が神学院の院長でした。彼の魅力は、何より人を大切にする人であるということです。相手が右であろうが左であろうがイデオロギーにとらわれずに誰でも敬意をもって接していました。

彼が36才でイエズス会管区長（アルゼンチンの）になった時は難しい時代でした。軍事政権とそれに対する勢力との戦いで内乱状態でした。分け隔てなく誰でも大切にしていたことの一つの例としては、神学院は労働者の多く住む貧しい地域でした。そこには売春婦もいます。彼のところに彼女たちもゆるしの秘蹟を受けに来たり、相談に来たりしていました。彼女たちの一人は泣きながらこう話してくれたのを思い出します。「あなたの院長が私のことを『セニョーラ』（御婦人）と呼んでくれた。とても嬉しかった」と。普段、周囲から軽蔑され疎まれている彼女が、一人の人間として敬意をもって接してもらったのが、本当に嬉しかったのだと思います。

ある冬の夜、神学院で彼と話していた時、誰かがベルを鳴らしました。貧しい人で『毛布が欲しい』と。彼はすぐに扉を開け、ていねいに接し、自分の毛布をとってその人にあげました。

彼が管区長になった時、まずやったことは、次のようなことでした。いろいろな事情で、ある会員は共同体から離れ、退会した人も何人かいました。彼はその人たちを探して呼び戻すことでした。イエズス会に戻らないかと。実際何人かの会員が戻ってきました。私にとってこれはとても印象深いものでした。彼は人を探す人なのです。

彼は神学生と一緒によく仕事をしました。修道院で牛や豚などの家畜を飼って世話をしていました。豚の世話は臭い汚いので、誰もしたくない仕事ですが、彼もよく手伝っていました。そんな仕事をしたあとで、大使の訪問を受けて接していました。『臭いかなあ？』と言いながら。

豚の世話もできるし、大使の接客もするその姿がとても魅力的でした。ごく自然に自由に行動する人でした。

彼はよく『貧しい人々から学べ、シンプルな信仰をもつ人から学べ』と言っていました。

新教皇に期待することとしては次のことです。これまでの彼の目立たない、誰からも評価されない小さな行動が、今の彼の人柄をつくり上げていると思います。ここに希望を見たような気がします。

他の組織であったら上に立つような人ではありません。でも、だからこそ彼が教皇になるということは教会らしい選択だったと思います。これは今の時代の希望だと思います。

今までどおりの笑顔で元気に人に接して行ってほしいですね。」

IV 池長潤大阪大司教のメッセージ

3月31日付「赤旗」の「日本国憲法」の欄で、「安倍政治の危険を人間回復で克服」をテーマに、述べている。

「…ローマで、フランシスコ新教皇の就任式に参加する機会を得ました。」

彼も筆者と同じ六甲中・高等学校の同級生で、上智大学でも同級生として哲・神学を学び、イエズス会に同級生として入会し、1968年に司祭叙階式を受けた。

彼は続けて述べる。

「教皇は就任式のミサの説教で、聖家族ヨゼフの祝日を祝い『ヨゼフは守り人だった』と言われ、『人間は人間を守ることに徹し、環境や自然も守る。それに気がついて世界中の人々が互いに守りぬいていく』と述べられました。

宗教者は宣教、布教にあたって、まずこうした人間回復の役目も果たしてゆきたい。憲法擁護の運動もその役割を負っています。」

V 他宗教と対話・協力する教皇

教皇選出以前から教皇は、アルゼンチンにおいて他宗教・他教派との対話に積極的に取り組み、とりわけユダヤ教・イスラム・プロテスタント福音派との間に信頼関係を構築することに貢献してきた。

1. ユダヤ教

ユダヤ教コミュニティと親密な関係を築いており、2007年にはブエノスアイレスのシナゴグで行われたユダヤ教のローシュ・ハッシュャーナーに出席している。彼がこの訪問に際しユダヤ教徒らに「兄であるあなたがたと共に」自身の心を見つめるために訪れたと述べた。

1994年にブエノスアイレスのユダヤ教コミュニティ・センターのあった AMIA ビルで爆破テロが起き85人の犠牲者が出た。この事件の11周年になる2005年、事件に関して正義の実現を求める文書に彼は署名している。その後2010年10月に再建された AMIA ビルを訪れ、ユダヤ教の指導者らと会談している。

世界ユダヤ会議の元議長イスラエル・シンガーは、彼とともにユダヤ教徒・カトリック教徒共同で行った貧困者救済活動の際の儀式で回顧し、「誰もが椅子に手をやり座っていた時に、ベルゴリオだけは地べたに座ったこと」を回顧し、特に印象的であったこととして彼の謙遜を挙げた。

またイスラエルのエルサレム・ポスト紙は、「ヨハネ・パウロ2世と違い、新教皇フランシスコは、実生活において、ブエノスアイレスのユダヤ人社会とも良好な関係を維持してきた」と論評している。

米国最大のユダヤ人組織名誉毀損防止同盟 (ABL) の、エイブラハム・フォックスマン会長は、新教皇就任に対して発表した声明の中で、「フランシスコ教皇の選出は、カトリック教会の歴史の上で意義ある瞬間」であり、教皇のこれまでの経歴に対しては未来に関して我々を安堵させるものがあると述べ、新教皇がこれまでユダヤ教とキリスト教の友好関係の構築に力を尽くしてきたことを称賛した。

2. イスラム教

ブエノスアイレスのイスラム共同体の指導者は、「常にイスラム共同体の友人としての態度」で、「宗教間の対話以上のものを有している」ベルゴリオの新教皇への選出を歓迎している。教皇選出以前、ベルゴリオはアルゼンチンイスラム布教指導者のシェイク・モフセン・アリー師に、カトリック教会とイスラムコミュニティの関係の強化を呼びかけていた。アルゼンチン共和国イスラムセンター (CIRA) 総長のスメル・ヌフリ師は、これまでのベルゴリオの行動から、イスラムコミュニティは新教皇に対して「宗教間の対話の強化に対する喜びと期待」を持っていると述べた。ヌフリ師は10年以上にわたる CIRA とベルゴリオとの関係がキリスト教徒とイスラム教徒の対話構築に寄与してきたと発言した。

3. プロテスタント福音派など

新教皇はブエノスアイレスにおいて、プロテスタント福音派とも友好的な関係を持っていた。教皇の友人でもあるブエノスアイレス大司教座の財務管理者は福音派の信徒である。アルゼンチンの福音派指導者ルイス・パラウ師によれば、ベルゴリオは福音派の友人たちと一緒にマテ茶を飲んでくつろいだり、ともに聖書を読んだり、共に祈ったりすることもあったという。パラウ師は、ベルゴリオがカトリックと福音派の間の信仰上の共通点や相違点をよく知る者であり両者の架け橋を作っていると述べ、彼の教皇選出によりカトリックと福音派の関係は和らぐだろうと予想する。

他のプロテスタントの指導者らも、彼が「プロテスタントをよく理解する」者であるという理解で一致している。このようにプロテスタントの指導者たちは、ベルゴリオの教皇選出を歓迎している。

新教皇はブエノスアイレスの大聖堂を異なる宗教の儀式のために開放した人物とブエノスアイレスの宗教的指導者たちから評されている。2012年11月中東の平和のため合同で祈りを捧げた。ユダヤ教、イスラム教、福音派、正教会の信仰の指導者たちを大聖堂に招き、各宗教指導者たちは、2013年の共同声明の中で、新教皇を「他宗教との対話のための深い度量の持ち主」と評し、「宗教間の分裂を修復させることがカトリック教会の大きな役目」と期待している。

VI アジアに、そして他宗教との対話に意欲的な教皇

外交筋は「教皇は日本に関心がある」と指摘する。出身母体のイエズス会は日本にキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエル（1546-52年）を生んだ。教皇はブエノスアイレス大司教時代にインタビューで「日本に宣教に行きたかったが、健康上の理由でかなわなかった」と明かしている。

今年はブラジルを訪問したが、来年の訪問先候補に日本と韓国が浮上している。日本への思い入れに加え、「韓国人殉教者124人の列福式が来年中に開催される見通し」（韓公淳・駐バチカン韓国大使）のためである。

3月22日駐バチカン外交団との会見で国交のない中国を念頭に「外交関係を持っていない国々と歩み始めたい」と呼びかけ、3月31日の復活祭ミサで朝鮮半島に「平和と和解」がもたらされるよう祈った。4月9日、潘基文・国連事務総長との会談でも朝鮮半島情勢を協議した。

イスラム教やユダヤ教など他宗教の聖職者と面会し、対話を深める姿勢も目立っている。ユダヤ教の過ぎ越しの祭り（ペサハ）にあたり、ローマのユダヤ教チーフラビのリッカルド・ディ・セーニ師（63）に「私のために祈ってほしい」と書簡を送った。

宗教対話を促進する「テベレ対話協会」のムスタファ・チュナップ・アイデン氏は、教皇が中世イタリア・アシジの聖フランシスコから名前を取った点に「イスラム教との対話に向けたメッセージ」を見る。キリスト教徒とイスラム教徒が聖都エルサレムの争奪戦を繰り広げた十字軍時代、聖フランシスコは「敵であるエジプトのスルタン（君主）に会いに行った」とされるためである。

世界を飛び回り「空飛ぶ聖座」と呼ばれた故ヨハネ・パウロ2世は、1986年に他宗教指導者をアシジに招いて対話に弾みを付けた。「貧者の教会」を目指すフランシスコ教皇の進める宗教間対話は貧困撲滅や弱者救済などが主要なテーマになりそうである。

ローマ教皇庁立外国宣教会の通信社アジアニュースの編集長ベルナルド・チュルベレラ氏は、中国次第で関係改善の一步はあると、次のように述べた。

「教皇がアジアに関心を持っている理由は二つある。宣教師として日本に行きたかったという個人的思いと、ヨハネ・パウロ2世が、かつて「3000年紀の務めはアジア」と発言したことだ。」

世界人口の3分の2を占めるアジアは世界経済の中心で、教会は活気にあふれ、信徒数は4～5%の成長を記録している。一方アジア55カ国のうち36カ国で宗教の自由の問題があり、教会が抑圧されている。

貧富の格差が大きく世界の貧困者の50%が暮らす。宗教原理主義者の問題もある。アジアには世界繁栄の場所となる可能性と同時に「新世界戦争」の発火点となる恐れがある。

教皇庁福音宣教省の長官は昨秋、中国にハイレベル対話を促す公開書簡を送ったが返事はまだない。教皇は対話を進めたい意向だ。

中国は教皇選出時に祝電を送った。就任式には代表を派遣しなかったが台湾の馬英九総統の参列を騒ぎ

立てもしなかった。中国が収監中の司教や労働キャンプに収容している神父を解放するなどの措置を取れば、関係改善への「最初の一步」になるだろう。

VII ハンス・キュング氏 (Hans Kung, スイスの神学者) が語る教皇

3月13日に起こったことを、果たして誰が想像していただろうか？1ヶ月前のこと、私が85才の誕生日を迎え、公務を引退しようと考えていた時、かってヨハネ23世教皇のもとに始まった第二バチカン公会議が夢のように再現しようとは、想像もしていなかった。3月19日ヨセフの祝日に、驚くべき名をつけた新教皇フランシスコが生まれようとは想像もしなかった。

かってどの教皇もフランシスコという名前を選ばなかったことを、果たしてマリオ・ベルゴリオは、その理由を考えたのだろうか？

13世紀のあの世界的に有名なアンジのフランシスコ、24才までアンジの大富豪の息子であった彼は、その家族、富、経歴、みやびではなやかな衣服さえも一切父親に与えたフランシスコ。

教皇フランシスコが選挙直後から選んだ全く新しいスタイルは、実に驚くべきことであった。前任者とは全く逆に、黄金の冠、宝石、みやびはなやかな衣装、赤靴、赤帽子、輝かしい装飾品などなどすべて放棄し、変革者らしいスタイル…。

さらに驚くべきことは、教皇が熟慮したのち、従来の格式のある荘厳な用語や慣習を廃止し、人々に分かりやすい親しみ深い言葉で、つねに語りかけるような口調で語る。今一つ新教皇が強調しているその人間性は実に見事で驚くべきことである。

彼が自ら祝福を与える前に、まず人々に「祈ってほしい」と願うその姿勢である。従来の教皇のために用意された宮殿に住むことを完全に拒否し、他の人々と同じ場所で宿泊し、諸枢機卿と車もレジデンスも共有し、またバチカンの外の少年院でイスラムの少女を含む若者たちの足を洗うなど、教皇のその足は、謙遜に人々の地についていることを示している。

13世紀にアンジのフランシスコと同志が象徴的に表示したものは、貧しさ、謙遜、単純の3つであった。冒頭に掲げた質問、なぜ過去の教皇がフランシスコの名前をとらなかったのか、の理由はこの3つにある。次の質問として、それでは今の教皇は、なぜあえてフランシスコの名前を選んだのか？

上に述べた3つのことを当時の教会と比較しながら吟味すると答えは出てくる。

- (1) まず貧しさだが、教会は財政的にもスキャンダルがあった。ところが、フランシスコに基づくならば、教会の第一優先順位は貧しい人々、弱い立場におかれた人々、周辺に切り捨てられた人々となる。教会はもはや富や資本につながるものではなく、積極的に貧しさと戦い、その使用人に雇用の模範的条件を整える。
- (2) 謙遜：かっての権力、支配、官僚、差別、抑圧、検閲、審査という教会体制ではなく、その逆に、人間性、対話、兄弟愛、もてなしの心、つまり指導者としては、みせかけではなく真の奉仕・社会的連帯である。宗教の新しい力、考え方が教会で起こる時、排除でなく、むしろそれを支える。
- (3) 絶対不変の教義の社会、検閲づくめの律法的押しつけ、すべてを規制する教会法の教会ではなく、よい知らせ(福音)、喜びをもたらす教会、純粋に福音に基づく神学、上から押しつけるのではなく、人々から聴く教会、教えるだけでなくむしろつねに学ぶ教会であること。

第3の質問が生じる。教会の変革は、厳しい反対に会わないだろうか？疑いもなく反対はある。特にローマ教皇庁からの反対である。中世以来積み重ねられてきた権力は放棄されることはない。

教皇が人々の下からの底力に基づいて、変革に取り組むならば、必ずやカトリック教会を超えて、世界の多くの人々の広い賛同を得られるであろう。

「キリスト者はフルタイムで働く」と語る教皇。

5月15日、サンピエトロ広場に集まった8万人以上を前に教皇は強調した。「神の望まれることを理解し、実行することは、単に人間の努力だけではできず、聖霊の働きによってつくり変えていただく必要があります。キリスト者であることはフルタイムの仕事に就くことを意味します。」

VIII ニューヨーク・タイムズ記者が伝えた教皇

レイチェル・ドナディオ (Rachel Donadio) 記者が「教皇フランシスコの謙遜と貧者最優先がバチカンに新風を吹き込む」というテーマで5月25日に書いている。

教皇自身が解放の神学と一致していることに基づいて、金融システムが現代世界を覆っていることを「金の文化」として激しく批判している。彼は、バチカンの管理業務の渦中から、サンピエトロ広場に集まっている数万人の民衆のもとに歩を進めて話を始める。そこには観光客も含め、実は大勢の群衆が彼を待ち受けており、教皇はかれらに語りかけた。

前ブエノスアイレス枢機卿ホセ・マリオ・ベルゴリオが教皇になってから、わずか2ヶ月であるが、教皇としての謙遜とその立ちふるまいゆえにバチカンは従来とは大いに変わった。

教皇のローマ・カトリック教会に対する新たな熱烈さと士気高揚の姿勢によって、バチカン自体も、そこで働く人々、信者すべてに、その熱意が伝わり、燃え広がっている。

バチカンで働く職員は「この雰囲気は全く変わり、そのエネルギーとただよう新風はすばらしく驚くべきことである。ある人はこれはハネムーンのようなのだが、その内容からしてそんなものではない」。

バチカン内部の改革のために、世界各地から8名の枢機卿を任命し、かれらの仕事はまだであるが、すでに実質的な改革は開始されている。貧しい人々を最優先する教皇の姿勢によって、すでに改革は始まっている。まず教皇のここでの生活の実態からして、明確なしるしが現れている。

教皇に用意されていた教皇宮殿には住むことを拒否し、聖マルタ宿泊所に他の人々といっしょに住み、そこで働く司祭や訪問者と共に食事をする。

バチカン新聞の編集長は前教皇と比較して語っている。「内容ではなく、スタイルが違っている」と。バチカン報道局長フェデリコ・ロンバルディ (イエズス会神父) は「彼の語り方のスタイルは、単純で直接的であり、決して荘厳さをふるまうような複雑さはない」と言う。

ギリシャをはじめとして南部ヨーロッパのカトリック諸国に起こっている欧州経済危機に関して、教皇は悲嘆のうちに繰り返し述べている。

「これこそ私たちの時代の危機である。」

最近の諸外国外交官代表との謁見においても語っている。

「今、私たちが経験している金融危機には最も深部では人間の危機に直面している。私たちは注意しないと黄金という偶像を崇拜するという、心不在の「金文化」という偶像崇拜をしてしまっている。顔のない、人間という目標もない経済独裁を崇拜してしまっている。」

教皇のスピーチには、確かに貧者最優先を特徴とする「解放の神学」のテーマを受けついでいる。つまり、福音の教えを貧しい人々を貧困から解放するために用いている。前述のロンバルディ (イエズス会員、バチカン報道官) が言うには、教皇はアルゼンチンにおいて解放の神学の第一人者であるイエズス会員と

共に、解放の神学を学んでいた。その当時から、教皇は前任の教皇と同じように、いわゆるマルクス主義のイデオロギーの要素を排除していた。

前述の語り方のスタイルの違いについてであるが、前任の教皇はつねに注意深く用意されたスピーチを忠実に読んでいたが、新教皇はいつも話しかけるスタイルで、彼自身の、また家族の歴史をもおりまぜていた。説教の中で、聖書の引用と同時に、自分の司祭の召命を受けたのは、母と祖母の単純な信仰のおかげであると言うこともある。

教皇はバチカン放送局など通信担当者を大いに惑わせていた。たとえば毎朝、バチカンで働く人々と共に捧げるミサで説教をするが、かれらは早朝から教皇につきあわねばならなかった。教皇はミサの前早朝から聖堂で信者と共に祈っており、ミサ後も参加者全員に親しく話しかけ、挨拶していた。前日のロンバルディ師は「私たちはいつも彼から学んでいた」と述べている。

一信徒は喜んで言う。

「彼が教皇になってから、私自身新たに生まれ変わったようだ。」一人の職員は、「毎水曜日の教皇の一般謁見に間に合うために朝1時に家を出るんだ。彼は実に我々一般庶民に非常に近い。彼の言葉はすべての人の心に染み込んでいくんだ。」

バチカン報道官は言う。

「この新教皇は誕生早々から、従来の群衆よりもさらに多くの人々を引きつけている。」

三世代にわたって教皇の記念品の商売をサンピエトロ広場の外でしている人は言う。

「前教皇のものはあまり売れなかったが、この教皇は違う。大群衆を引きつけるから、かれらは我先に買って持って帰る。あの教皇のスマイルもそれにつけてから…。」

新聞編集長のピアン氏はいう。

「前教皇以上にこの教皇は報道関係者との関係を楽しんでいる。前任の教皇はすぐに偏見をもたれて苦しんでいた。たとえば他の宗教の人々や進歩的カトリック信者。その他の問題は事実よりも教皇の独断と偏見のゆえに起こったもの。ところが新教皇は、そのような反対に対して非常に親切に適切に対応している。」

前述のロンバルディ師は言う。

「前教皇は神学者であり、よく次のような警告を与えていた。『教会から離れることはリスクであり留まるべきである。』それは重要な注意であるが、時には強調点を変えてもよいだろう。つまり神の愛、慈しみが何と偉大かをくり返すならば、そういう人々の心は変わる。実は新教皇はそれをしている。」

おわりに

教皇フランシスコの言葉、態度、信仰者としての模範的な生き方に好感を覚えるのであれば、私たちもこれまでの信仰の態度を見つめ直し、キリスト者として自分に与えられた使命を再発見するように招かれている。

教皇フランシスコの選出を導いた聖霊は、今度は教会に集う私たちを、その教皇とともに新しい使命へと駆り立てているように感じる。ところで、この記事をいっそう詳しい内容にしたものを書物「教皇フランシスコ―「小さき人々」に寄り添い共に生きる―」として出版する運びとなっている。それを参照し、また多くの方々に紹介していただければ幸いである。